# 基調講演
# 「ロータリークラブと私」

IM リーダー
第 2790 地区パストガバナー　白鳥　政孝
（市原ＲＣ）

本日の第 3 分区 A・B の合同 IM において皆さまの前で基調講演をということに加えて「ロータリークラブの本質」を語れと言われ、大変光栄に思っていたのですが、どう考えても私の力量で皆様がそれぞれ考えているロータリークラブの本質を画一的にかくかくしかじかあらねばならないと述べることは到底かないません。なぜならば、ロータリークラブに対する皆様の姿勢は 10 人 10 色の価値観を持っており、しかも、クラブの伝統といえるクラブの文化もございます。その価値観と文化とがあいまってクラブの雰囲気を作っているので「ロータリークラブの本質」とは、と軽々しく述べることができません。そこで並木ガバナー補佐と石井ガバナー補佐および実行委員会の皆様にお願いして「ロータリークラブと私」というテーマに変更させて頂きました。IM の準備がある程度整っていたのですが、ご関係の皆様の好意あるお許しを得て今日の運びになったことをお伝えして話に入ります。

1925 年にノーベル文学賞を受賞したイギリスの劇作家であり、辛口の評論家で有名なバーナード・ショウがロータリーを一口で表した言葉に「ロータリーとは金持ちが昼飯を食べるところだ」とか、「ロータリーを殺すには刃物はいらない、前年度踏襲していればいい」と言っています。バーナード･ショウ独特の表現ですが､ロータリークラブの本質を単的に指摘しているように思います。この皮肉ともいえる言葉を念頭において｢ロータリークラブと私｣について話を進めてまいります。

私は市原ロータリー･クラブに 46 歳で入会し、33 年目になります。入会してからは、与えられた委員会活動を通して先輩からロータリーの知識やルールを教えられてロータリーの全体像を描くことができました。それはクラブ例会からよりも、セミナーへの往復の車中や炉辺会談での談話からロータリーを知るうえに大変効果がありました。日ごろいかめしい顔付きの先輩と委員会活動で行動をともにし、ロータリーの話を聴くにつれ先輩ロータリアンに親近感を抱くようになりました。それからは例会に気軽に出席できるようになり､ロータリーを身近に感じるようになってきました。そうなるまでに 3 年ぐらい掛かりました｡それまでいつ退会するかチャンスを窺っていたのですが、親睦活動委員会とかインターアクト委員会などの委員にさせられていくうちに、辞めるに辞められなくなったというのが実情でした。皆さまの中にも思い当たる方もいるのではないかと思います。

重荷であった週報の作成を何回も担当し、テープ起しから始めて、分からない言葉を訊きながら要旨を纏めるのに苦労しました。そのうち要領を覚えてテープ起しよりも、話の要点をメモして卓話の要旨を書き上げる方が数段早く、しかも正確にできるようになりました。こうした経験は、その後の各種講演やセミナーを受講する際にメモをとる癖がついて大変役に立ちました。

クラブ活動ではいろいろな役目を与えられてセミナーや地区大会、情報研究会や IM などの会合に出席しているうちにロータリーの神髄とか職業奉仕の本質を少しずつ知るようになりました。それまでに気にも

かけなかった洞察力、寛容、親睦、利己と利他、多様性、高潔性、リーダーシップとかの言葉に触れては、一体それは何か、また世界の識字率、貧困、環境、水保全、ポリオなどにも関心をいだくようになり、それらを真剣に考えるようになりました。

そうこうしているうちに、思いやりの感性（センス）が、私のロータリーライフの中でごく自然

に育まれてきたのでしょうか、クラブ、家庭、会社での自分の行動に変化が起きているのに気づいてまいりました。周囲にたいして感謝の念を持つようになってきたのです。

鎌倉時代初期の道元禅僧（曹洞宗の開祖）の言葉に「霧の中を歩めば、覚えざるに衣湿る」という一節があるそうです。朝、起きて朝もやの中を歩いて帰ってみると、知らないうちに衣が湿っていた状況をいっています。その場所にいるときはわからないが、知らないうちに自然と環境の影響を受けているという話です。このようにロータリーも例会の出席を重ねているうちに意識せずともよい影響を受けることもありました。

中国の孔子の後を継いで仁・義・礼・智の徳を説いた孟子の「孟母三遷の教え」を思い出します。その母親は最初に墓の近くにあった住まいを、次に市場の近くに、さらに学校の近くと三度も居を移し替えて、子どもの教育のために良い環境を得ようとしました。環境の及ぼす影響は大きいです。

入会してから暫くしてロータリーの職業奉仕を知り、それまで考えても見ない世の中の経済活動の内面的な仕組みに関心を持つようになりました。学生時代は資本を有する資本家階級と自己の労働力以外売るものをもたない労働者階級とがあり、労働者階級は資本家階級から搾取されているという仕組みを聞き及んだ時の驚きと、同じくらいの衝撃がありました。世の中の仕組みを見る観点の幅が広くなり、様々な見方を身に付けることができてまいりました。

ロータリーの職業奉仕からは、分業の社会において自分の職業は天から授かった天職と心得て、社会の仕組みの一端を担っていると意識して、自分の職業を懸命に全うしなければならない務めがある。つまり職業を通じて世の中でお役たつという考え方に接した時にも目を開かされた覚があります。それまでは自分の生計を立てるのが第一義であり、ただ、お客様のためになることだけに集中して世のため人のためなどは思いもしませんでした。学生時代が第一のカルチュア―ショックとすれば、ロータリーの職業奉仕の理念との出会いは第二のカルチュア―ショックでした。そしてロータリーに深く傾注するようになりました。

「超我の奉仕」にある奉仕の理念や「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という経営の真理を学ぶと同時に、その考えを身につけようと努力したのですが、学ぶことはできても身に付けることは本当に難しいと今でも思っています。「言うは易く行なうは難し」です。しかし、「知行合一」「言行一致」です。知ったら行なわなければならない、言ったらそれを行動に移さなければならないと思い、今でも努めていますが、なかなかその域に達することはできません。いまだに発展途上の人間です。

ロータリーに入会して 13 年目から 6 年間地区職業奉仕委員会と 2 年間地区青少年交換委員会を経験しましたが、多くの先輩ロータリアンや地区委員の方々との交流から今までにない知識を得て、数々のイベントを通して友情を育むことができました。多少仕事に影響がありましたが、それを補って余りあるものがありました。

20 年ぐらい前のことですが、八千代ロータリークラブの PDG の鈴木憲輔先生が地区職業奉仕委員会のカウンセラーをされていました。私はクラブから推薦されて地区職業奉仕委員会の委員になり、記録係を任命されました。記録係りですと職業奉仕のセミナーの記録を纏めて報告書を作らなければなりません。セミナーの基調講演とかフォーラムをテープ起こしから始めるわけですが、これは大変でした。しかしクラブで週報をやっていたときの経験が役に立ち鈴木先生に指導して頂きながら報告書の作成に励みました。鈴木先生の薫陶をえてロータリー以外の雑談の中に学ぶことがたくさんありました。

その時委員ひとりでありました成田クラブの成田数正様との出会いも忘れることができません。この方の読書量の多さに驚き、大いに刺激を受けたものです。成田さんはロータリーを退会してからも毎週のよう素晴らしい内容の書簡を送って頂き 4 冊のファイルになっています。

地区委員の体験は、1 クラブ内のそれとは比較になりません。ロータリーの広さ、奥行きの深さ

を実感したものです。今、ロータリーはクラブや地区を越えて、さらに国を越えたグローバルな活動を奨励しておりますが、その価値やメリットは限りなくあると実感しました。

同じようなことがクラブ内のメンバーとの交流からも感化されて趣味や仕事の幅も広くなり、今までにない音楽、絵画、建築、旅などに強い関心を持ち、美しさへの感性（センス）が身につくようになって、ロータリーは私の人生に豊かな彩りを添えてまいりました。それは予想をはるかに超えたもので、私にとってロータリーは、感動的であり、刺激的であり、教訓的であり、未知の世界への誘いであり、人生最大の師に出会ったといえるほどになりました。

もっと知ろう、もっと学ぼうという気持ちも湧いてきて、学べば学ぶほど、また交流の輪が拡がれば広がるほど、私にとってロータリーは奥行きをましてまいりました。ロータリーに入会して職業奉仕の思想的な面ばかりでなく「知的な好奇心」も大いに刺激されて、いろいろな感性が身に付き、確かな判断力（常識）が付いてきました。今振り返りますと、ロータリーのメリット（ロータリーからの贈りもの」とは、与えられるのではなく自らの知的な好奇心、向上心を高める行動のうちにあったのではないかと思います。ロータリークラブが礎とする親睦と奉仕の中に自己を研鑽する機能が備わっていることです。これはロータリーの大きな特徴ではないでしょうか。

何ごともそうでありますが、自ら求めなければ得られないのです。しかし、私はいつもそのような気持ちでいたのかというと、そうではありません。ただ与えられたことを誠実に尽くすということをしていた結果、そうなったのではないかと思います。

ロータリークラブで学ぶことが多くあったのですが、次第にロータリーの思想（理論）と奉仕（実践）との関連に関心を持つようになりました。ロータリーは一つの人生哲学である。それは実践しなければならないといわれていますが、原理を踏まえていない実践だと世に役立つ活動とはいえないのではないかと思うに至り、理論と実践の関連についても考えるようになりました。一人ひとりのロータリアンがロータリーの理念を踏まえて世に役立つ活動を展開するのが、ロータリーの基本であると考え、ロータリーの理念と実践の関係は切り離すことはできないと思うようになりました。

その時、ホンダ技研工業の創業者である本田宗一郎さんの言葉に出合いました。「理念なき行動は凶器であり、行動なき理念は無価値である」といって、理念のない思いつきの行動は会社の発展どころか、会社の命取りになりかねない。また、どんな立派な理念も実践しなければ意味がないと、理念と実践の関連について明快に述べていたのです。本田宗一郎さんが社長を辞めたときホンダ自動車の売り上げは 3 千 900 億円だったのが、今では 9 兆円以上を売り上げるグローバル企業へと成長し続けています。会社は本田さんの遺された理念を忠実に信奉してきた結果、世界的規模の会社にまで発展しています。

そのホンダ技研の理念とは人間尊重を掲げ、自立、平等、信頼、それに買う喜び、売る喜び、創る喜びなどを掲げています。内容はロータリーの理念と殆ど変りがありません。もし、後継者が創業者の理念を逸脱して利益最優先に走ったとすれば今日のホンダの発展はなかったかもしれません。行動の裏付けとなっている理念（哲学）が如何に大切であるかを知ったのであります。

入会したてのときは、ロータリーの理念については殆ど理解しておりません。分かりにくいロータリーの理念を書物や人に教わったりして知識を学ぶことも大事だが、ある程度学んだら実際に行動することで理解のヒント得られました。もう一度本を読んで勉強しようとか、反省して次の実践の時もう少し改善を加えようとか、果たしてこの実践活動は理念に沿っているか、どうかを考えるようになりました。つまり学ぶことと実践の繰り返しが、より高いレベルの親睦と奉仕へと移行します。このように理念を学んでは、実践する。実践しては学ぶ、の繰り返しが、より効果的な質の高い奉仕活動へとどんどん変化してきました。私はここまで分かるのに相当な時間がかかりましたが、ロータリー米山記念奨学会やロータリー財団の活動は練りに練られており他の追随を許さない質の高い事業であると思います。

学びと実践の繰り返しから奉仕活動の本当の意味を知り、汗を流すことが個人の資質の向上に繋がり、ロータリーは現場での行動、奉仕活動がいかに大切であるかを知ることができました。体験から滲みでる知恵をもってロータリーを楽しみ、世に役立ち、人のためになる喜びを味わい、想像以上の大きな感動を得たのです。それはなにものにも変えがたいものでした。学びと実践の繰り返しは自らの人間形成にも大変役に立ったと思いました。

ロータリーは感性や教養を育むのにも私には、うってつけの場所となり、利害関係のないロータリーでは、ロータリーの理念を見据えてクラブ運営やプロジェクトを企画し、自由闊達に話しあいながら進める中に、お互いの意見を尊重しあうプロセスを大事にするというロータリーの行動哲学があるので、そこでも多面的にものごとを捉える判断力を養うことができたと思います。

こうしてみると過去や未来も考えない刹那的な楽しみを求める親睦活動の質とロータリーでいう「親睦の哲学」に基づいた親睦の質とは、大きな違いがあります。「親睦の哲学」とは、仲間同士として相和するうちに心を磨きあい人間性の向上をはかることにあり、ためになったとか、良かったいう思いが湧いてくる親睦のことをいい、お互いの良い面を感化しあい、感性を磨くことがロータリーでいう親睦であります。「ロータリーを楽しむ」とか、“ Enjoy Rotary ”というのはこのようなことをいうのではないでしょうか。決して刹那的な悦楽に浸ることではないと、心ある仲間と夜遅くまで侃々諤諤と何回も論じたこともありました。

もしクラブ内でお互い感化しあうような親睦の雰囲気がないとするならば、そのクラブは社交クラブか、単なる奉仕団体にすぎません。昼飯を食べるだけの例会になる恐れがあります。ロータリーから受ける「親睦の哲学」の恩恵を自ら放棄しているようなもので、クラブ内の雰囲気を少しでも良い方に向けていこうという気持ちが根底になければならない、そこには向上心溢れる仲間の集いとなり、文字通り「例会は人生の道場」とか、「自己研鑽を積む場」となります。そしてロータリーからの恩恵はそのようなロータリアンに沢山贈られてきます。クラブの活性化とはそのような状況下にあることをいうのでありまして、親睦の哲学を実践することはロータリー存亡の危機を回避する王道でもあります。

ロータリーの職業奉仕の理念を学ぶのも、クラブ奉仕からいろいろ体験しながら友情を育むのも、社会奉仕や国際奉仕から世の中の道理や不条理を知るのも、すべては週一度の例会で会員同士が語り合うことから始まります。このことを皆様十分に知っていることですが、それを自分のロータリーライフに活用しているかどうかは、例会の出席率からも判断できます。

私はクラブや地区から、あるいは世界中のロータリーから見聞を広め、未知の分野への関心から知識を得て、また実際に体験してみることから分別あるセンスともいえる教養や知識が身について自己中心的な考えから少しは抜けてきたのではないかと思っています。

人生にはいろいろ判断し、決断を下すことが多くあります。ましてや責任ある職業人である皆さまは判断の基準となる一線を何処に引くかを迫られることがあります。その時、ロータリーで培った価値観や判断力や教養によって的確な決断を下すようになれるのも「ロータリーの恩恵」ではないかと思っています。

「超我の奉仕」や「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」というロータリーのテーマに基づいて自己制御の修練をしていますが、この修練は、企業が永続性を保ち、繁栄の道から逸脱しないような判断力をも養っています。そればかりではありません。ロータリーは週一度、同じ釜の飯を食う仲間との語り合いによって心が癒され、刺激を受けて新たな気持ちで職場に戻ります。こうしてみますとロータリーはいろいろな恩恵を私たちにもたらしています。

その恩恵の量と質はロータリアン自身の心の持ち方次第によって決まります。日常なにげなく行なっている週一回の例会、歌の斉唱、ＩＭの開催、各種セミナーなど、何故そんなことを行なうのかを歴史的に問うことも恩恵を自分のものにする一つの方法です。「賢者は歴史に学び、愚者は経験

に学ぶ」といいます。歴史から学ぶことは数限りなくあり、奥深いものがあります。ロータリーの歴史を皆で辿ることなどクラブの活性化の大事な手段となります。

こうして皆さまとお会いし、話をさせていただいておりますが、もし、ロータリーに入会していなかったら、もし、ロータリーに真摯に取り組んでいなかったら、これほど世の中の真実（本質）を知りえたかどうかも疑問であります。ロータリーが及ぼす影響は（恩恵）は実に凄いと思います。

入会して 33 年近くなる今、心が後ろ向きになったとき、ロータリーを辞めようかと何度も思ったこともありますが、ロータリーをより深く知り、素晴しいロータリアンとの出会によって後ろ向きの心が前向きに転じたりして、退会する、しないの繰り返しでしたが、退会しないでいて本当に良かったと思っています。

こうしてみると所属するクラブ内の雰囲気がどんなに大切であるか、いうまでもありません。そうなるために、私たちロータリアンは一番に考えなければならないのは、クラブを切磋琢磨、自己研鑽の場とし、友情を育む場として意識するか、しないかで決まるのではないでしょうか。私のクラブ、私たちのクラブとしてクラブの雰囲気作りをおろそかにできないとつくづく思います。

どうか皆さま、ロータリーから受ける恩恵に制限はありません。こうして得た恩恵をさらに家族に、会社に、地域に、世界に分かちあうことがロータリーの奉仕の流れではないでしょうか。世の中で奉仕するのは義務ですのではありません。私たちの権利であります。権利を行使していこうではありませんか。

私は 32 年間のロータリークラブ･ライフにおいて多くの感動と恩恵をたっぷり受けて、自分自身の人作りに供しています。これもロータリーとロータリアンである皆さま方のおかげであると、また家族、会社の従業員のお陰でもあると感謝しております。

最後になりますが、安倍首相が強靭（強くて粘り強い）な日本国にしていくと言っていますが、強靭な国となるポイントは多様性（ダイバシティ）が決め手であると思います。つまり私たち国民が自由闊達に意見を述べることができることです。お互いが他の人の言動を心から認め合うという姿勢です。これが強靭な国つくりの根底になければなりません。それに個々の考えを認め合う、容認することからがお互いが思考能力を高めることです。一切の思考を停止し、議論が停滞する社会はあってはならないのです。自分の考え（思想）を押し付けるような行為も慎まなければならない。世の中に不変の真理はあっても、絶対に正しいということはありえない。種々雑多な考えがあるのは当たり前であると認識することです。ロータリークラブでも同じことが言えるのではないかと思います。

ロータリーが戦略的計画の中心的な価値観に高潔性（品格の向上）と多様性とリーダーシップを掲げています。この戦略的計画の中核的価値観はロータリーの目的を実践していく上においてもっとも身に付けようとしなければならない価値観であると思います。今までロータリーの目的にのみ重大なる関心を持っていましたが、今度は五大奉仕とともにロータリーの中核的価値観について皆さまと話し合いたいと思います。

このような話をする上において、ロータリーの世界は平等といいますが、もう 1 歩進んでお互いの関係はイーブン（対等）であることも意識したいものです。老いも若きも、男性と女性も、地位や名誉も、偉いも偉くないも関係ない一対一の人間関係は対等（イーブン）であることです。ここにもロータリーの特徴があるのです。一人ひとりの考えを尊重し、イーブンな関係こそがロータリークラブの活性化と発展の礎となるのではないでしょうか。

「ロータリークラブと私」のテーマに沿っていろいろと申し上げましたが、皆様のロータリークラブライフの中で何かご参考になれば幸いでございます。

終わりになりましたが、本日の IM を企画し準備して頂いたガバナー補佐の並木鷹男様、石井七郎様、千葉ロータリークラブ皆さま、千葉北ロータリークラブの皆様に心からお礼申し上げます。また本日ご出席の皆さまにも厚く感謝を申し上まして話を終わりにさせていただきます。

ご清聴有難うございます。